

---

# 殺意

石子

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殺意

### 【Nコード】

N8474I

### 【作者名】

石子

### 【あらすじ】

静かな夜の喫茶店。

待ち合わせの相手は、何故だかやけに急いで店内に入ってきた。

静かな夜の喫茶店。

待ち合わせの相手は何故だかやけに急いで店内に入ってきた。

若い男性店員さんの「いらっしやいませ」という声を聞き流して  
くるりと店内を見渡し、私と目が合うとこちらに近づいて来る。

どうやら走って来たらしい。暑いのか着ていたコートを脱ぎながら  
こちらに近づいて来て、腰を下ろすのとほぼ同時にコートを無造  
作にイスの背にかけた。

「どうかしたの？ そんなに急いで」

別に待ち合わせの時間に遅れていたわけではない。そんなに時間  
に正確な人でもなかったはずだ。

私は不思議に思っただけ、相手が一息つくまで待った。

「お前じゃなかったんだな」

第一声がそれだ。

「何のこと？」

飲んでいたオレンジジュースのストローから口を放して首を傾げ  
た。

ちょうどその時、店員さんがお水を持ってきてテーブルの上に置  
く。それをひったくるように半分くらい一気に飲むと「コーヒー」  
と決まりきったセリフのように告げた。

失礼な態度だと私は思ったけれど、気にする様子もなく「かしこ  
まりました」と受けてまたカウンターの向こうに戻って行く店員さ  
ん。

「……で？ 何のこと？ 私じゃないって？」

「俺を殺そうとしたのが、お前じゃなかったんだってという意味だ  
よ」

なにやら物騒なことを言い出してきた。

別に、この男とは恋人同士ってわけでもないし何か恨みがあるよ

うな間柄でもない。正直、殺そうなんて感情を持つほどこいつに興味はないのだけれど。

「……っていうか、それってあんたが殺されそうになったってことよね？」

もう一度オレンジジュースを飲む。

顔を上げると、しかめっ面と目が合った。

「ああ。あの公園の階段だ。誰かに後ろからつき落とされそうになったんだ」

この辺りで公園といえば一つしか思い当たらない。

「この公園のこと？」

私はテーブルの上に置いていた新聞の記事を指さした。

『会社帰りの女性が公園の階段から落ち、死亡。警察は事故と他殺の両方の線で捜査中』との内容。実はこの女性というのがうちの会社の社員であり、今日は入社した時からこの話題で持ちきりだった。

「そつだよ」

言わなくてもわかるだろうとでも言いたげだ。イライラしているのがよくわかる。

公園から下の道に出るための階段はかなり急な傾斜がついている。すぐ横になだらかなスロープになった道があるので子どもやお年寄りはそのちらを利用するようだが。

「神経質になりすぎなんじゃないの？ 被害妄想よ。突き落とされそうになった、って誰によ？ 私じゃないか、なんて疑ってたくらいだから犯人を見たわけじゃないんでしょ？」

あの辺りは暗いから、木の枝かなんかにぶつかったのを押されたと勘違いしただけじゃないんだろうか。

それでびびってここまで走って来たなんて、肝の小さい奴だ。

あ。もしくは私を犯人だと思って、ちゃんと待ち合わせのこの喫茶店にいるか確かめるために先回りされないよう急いでやってきた

ということか。

どちらにしても馬鹿馬鹿しい。

「確かに、暗かったし犯人の姿を見た訳じゃないが、近くに人の気配を感じたんだ。押されて、必死に踏み止まったが振り向いたときにはもう誰もいなかった」

慎重に思い返しているのか、ゆっくりと状況を語る。

……っていうか、

「やっぱり、気のせいでしょ、それ。勝手に足滑らせたただだってそれともなに？ 清美の亡霊でも出たって言いたいわけ？」

私のその言葉に相手は一瞬凍り付く。そして慌てて周りを見るが、もともと喫茶店の客は私とこの男の二人だけ。店員さんもカウンターの奥でコーヒーを淹れてるようで、私たちの話し声が聞こえるわけもない。

いちいち肝の小さい奴だ。

「おい。そんなに軽々しくあいつの名前を出すなよ。ばれたらどうするんだ？」

声を潜めて私をたしなめた。

私は思わずため息をつく。

「ばれたりしないわよ。そんなに心配なら最初から彼女を殺さなければよかったのに」

「なんだとっ……」

そこに、コーヒーが乗ったお盆を持って店員さんが近づいてくるのが目に入ったので二人とも口をつぐむ。

その沈黙を特に不審に思うこともなかったようで、「お待たせしました」とコーヒーをテーブルに置くと、店員さんは定位置のカウンターの奥に戻って行った。

ほとんど機械的にコーヒーを口に運ぶと、また私に向かって言葉を続ける。

「殺そうって話を持ちかけてきたのはお前の方だろう？ 俺はそれに乗っただけだぞ」

実行したのはあんたでしょう、というのは飲み込んで別の言葉に置き換えた。

「わかってるわよ。私たちは共犯よね。いざという時にはアリバイを証言してあげるから」

もともとそういう手はずになっているのだ。

この男は、清美に弱みを握られて金を強請りとられていた。

私は、会社でライバルとでも言うべき立場の彼女に、あることないこと言い触らされて次のプロジェクトの主任の座が危ういものになっていた。今までだってそういうことがあつたし、彼女が生きている限りは今後もそういうことがあつただろう。

この男と私は利害が一致したのだ。

実行してしまえばあつけないものだった。

悲しみや罪悪感はなかったし、何事にも執念深い清美ともう会わずに済むと思うとせいせいした気分だ。

「まあ、ニュースとか見てたらまだ殺害されたのかどうかもわかってないみたいだし。私だってあんたが死んじやったら困るしね。口封じのためにあんたまで殺すなんて全然考えてないわよ」

本心だ。

正直、この小心者が黙っていらなくなつて自首でもするんじゃないかという心配はある。

けど、そうなつたら私は関係ない振りをすればいい。だって、私はこの男に清美が帰りにあの階段を通ることを教えただけだし。まさか本当に殺すなんて思いませんでした。って言えばいいだろう。

「でも、本当に俺は突き落とされそうになつたんだ」

深刻な顔でまだ言う。

それはなんか別な人に恨みをかけてるだけか、ニュースを見ておもしろがって無差別に人を突き落とそうとしている愉快犯が出現したとかそういうことなんじゃないのだろうか？

「だから。考えすぎだつて。まだ気が高ぶってるからそう思えるのよ」

ほとんど氷だけになってしまったオレンジジュースをズズッとストローで飲む。

「そうか……。そうかもしれないな」

ぼつりと自信なさそうに呟くのが聞こえた。

「そうよ。とにかく。今日は、一応ほんとにあんたが清美のこと突き落としたのかちゃんと確かめたくてここに呼び出したわけだけど、やっぱりあんたがやってくれたつてことで間違いないみたいだし。今後は何かあった時に連絡とるくらいで、それ以外は一切会わないようにしましょ」

その方が万一アリバイが必要なときに証言に信憑性がでてる、……と思う。

そのアリバイのことは事前に打ち合わせ済みだ。

相手ももちろんそのつもりだったらしく、

「ああ。わかってる。俺だつて、今日ここに来たのはお前の意思を確認しておきたかつたからだ。何事もなければもう今後会うことはないからな」

そこまで話すともうお互いに用は済んだ、という感じになった。少しだけ沈黙が続いたが、

「じゃあ、俺はもう行くから」

テーブルに千円札を一枚置いて、男は立ち上がった。

「わかった」

もう会うことがなければいいんだけど。そんな気持ちで男を見送ることにする。

イスに掛けていたベージュのコートを手に持って、喫茶店の出口に向かって歩きながらその袖に腕を通す。

何気なくその後ろ姿を見ていた私は、息を呑んだ。

呼び止めようか一瞬迷ったが、私は無言で見送ることにした。

コートの肩のところにはドス黒い色の血で、くつきりと手形がつ

いていたのだ。

左手のその跡は、左利きの清美を思い出させた。

男が出ていった後、喫茶店のドアベルがカランと鳴ってドアが閉まる。

また、店内は静かになった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8474i/>

---

殺意

2010年10月8日14時49分発行